

ゴーゴリとルソーイズム

——『死せる魂』の問題——

佐々木 寛

『死せる魂』第2部は、周知のように、未完の草稿で数章分が残されたものである。それらの章全体を通じて第2部は、第1部と比べると、教訓性が余りにも露骨に前面に出ているために（つまり第1部に見られたようなゴーゴリの天才的な笑いの力が影をひそめているために）、これは失敗作である、とか、ゴーゴリの天才をもってしてもロシアの理想的な姿を提示することは不可能であった、とか、あるいはまた、ゴーゴリが進歩的な立場から保守反動の陣営に転じた結果生じたものである（つまり思想上の転換が第1部と第2部の間に認められる）というふうに言われている。そしてこのことが、『友人との往復書簡抜粋』と相俟って、ゴーゴリ研究上の大きな問題となっている。

ナレージヌイの小説『ロシアのジル・ブラース』（1814）、『アリスチオン』（1822）、ブルガーリンの小説『イワン・ヴィジギン』（1829）との関連で『死せる魂』第2部を読むとき、この3人の作家における нравоописательный роман（世態風俗描写の小説）あるいは нравственно-сатирический роман（諷刺と教訓の小説）というジャンルの共通性の背後に、18世紀末から19世紀30年代にかけてのロシアの文学・社会思想上の重要なテーマ、ロシアのルソーイズムという問題のあったことがわかる。

それは手短かにいうならば、18世紀の半ば以降国家に対する奉仕の義務を免除され、

土地と農奴に対する独占的所有権その他を認められて特権階級に転じた地主貴族の、無為な生活に由来する文化的な頹廃、肉体的、社会的な急速な衰退という現実であり、そしてこれに抗する生活原理としての、自然の懷に抱かれた父祖伝来の領地での開明的地主と啓蒙された農民の生活の提起だった。その際、都市文明の虚偽（自然に反した諸々の欲求、知的モードとしての懷疑主義・無神論、虚飾の学問・芸術、享樂主義のエゴイズムと冷淡 etc.）を批判する原理となったのが、ルソーの「自然」と「感情」の教義であり（但し、彼の思想のもつ革命的な響きを抑えたもの）、つまるところそのルソーイズムとは、啓蒙と信仰の二語に帰せられるものだった。

『死せる魂』第2部に見られる精力的な地主コスタンジョーグロや信仰心の篤い商人ムラーゾフその他の形象は（いずれもナレージヌイ、ブルガーリンの小説にそのプロトタイプを指摘しうる）、このようなロシアのルソーイズムというコンテクストにおいて読むときに初めてその意味が了解されるのである。

※ナレージヌイとブルガーリンについては、拙稿「B. T. ナレージヌイ研究資料解説」（『ロシア語ロシア文学研究』第13号、1981年）および「ブルガーリンの小説『イワン・ヴィジギン』（一八二九）について」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要 別冊第九集』、1982年）を参照されたい。